

1

1 I ア 起
イ 転
II ウ
2 お
3 様

3 ウ
4 どこ
5 短歌
6 から

6 イ
7 (記述題)

8 日常的

9 X さ
Y 化
Z 的

10 a 着目
b 辞書
c 達成

2

1 a 単調
b 季節
c 勝手

5 放り投げ
6 白(い)
7 A イ
B ア
C 工

8 I ウ
II (記述題)
9 才
10 上手い。

(7 完答)

1

7 が手に集まったら夕陽の力が
が強すぎた、眼鏡がこ
われ、そうだから。
手集まった夕陽の力が
強すぎた、眼鏡がこ

(同意可)

2

8 II たとえネズミが獲れなくても、ハチ
を家族にとってかけがえのない飼猫
としてかわいがる気持ち。

(同意可)

配点	
1 9・10 2 1・2	各2点×12=24点
1 7 2 8 II	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

I — 線①は「物事の順序を示す」「起承転結」に対して、「人生にははつきりとした始まりも盛り上がりもないものです」と説明している。「起承転結」ということばから「始まり」と「盛り上がり」にあたる漢字一字をぬき出せばよい。II — 線①の後は一行空いているが、話の流れは「人生にははつきりとした始まりも盛り上がりもない」↓「ぜひ、日常を切り取って歌にしてみてください」となっている。この流れをふまえて「↓」のところにとどのような説明があてはまるか考えるとよい。

2 直後の解説文の中からひらに置かれたものが何かを探せばよい。詩など引用された作品に解説文が付いているときは、作品のことばと解説文のことばをしっかりと対応させていこう。

3 辞書で「邂逅(かいこう)」ということばを引いているときの様子を表した短歌である。「かいこう」を通り越すのは、「戒厳(かいげん)」と「骸骨(がいこつ)」の間になる。

4 問2と同様に短歌と解説文をしっかりと対応させていこう。解説文の終わりに「そのことを、『眸のさびしさは眸を迷はしむ』と表現する」とあるので、ここをヒントに「そのこと」が指す内容をたどっても答えが見つかる。

5 『瞬間』の説得力を増幅させるといえることがどういふことなのかかわりにくいかもしれないが、「短歌」と「瞬間」については説明がまだ続いているので、そこまでしっかりと読んで答えの見当をつけていこう。答えにふくまれる「余計な感じ」ということばが、— 線④の「避けられがち」ということばと意味のうえでつながっている。

6 — 線⑤はこの一文の述語の部分になるので、対応する主語にあたる部分を確認しよう。『確かに！』と膝を打つような並びにしたこととあるので、「ことばの順番を変えたこと」にふれているイが答えとなる。

7 — 線⑥の後に「取り返しがつかなくなりそうですから」と書かれている。これを解答の字数に合わせてくわしくまとめ直せばよい。「眼鏡の歪み」を直そうとして「取り返しがつかなく」なるとは、もう直せないうらいゆがんでしまうということであろう。

8 この文章は読者に、「日常を切り取って」短歌を作り、自分の「生活を歌の中で見つめ直して」みることをすすめるために書かれたものである。取りあげられた五つの短歌はすべて日常を切り取って歌にしたものであった。

9 いずれも「接尾語(接尾辞)」といって、ことばの終わりに付くことで意味をつけ足したり、ことばのはたらきを変えたりするものである。「的・性・然・化」は熟語の組み立てを考えるうえでも大切な接尾語なのでよく覚えておこう。

10 a「着」の四画目と七画目を一画で書いてはいけない。b「辞」はつくりを「幸」としないように気をつけよう。c「達」はしんにょうの中が「土」と「羊」を縦にくっつけたような形になることに気をつけよう。

2

1 a「単」を「巢」としてはいけない。また、同音異義語の「短調」と取りちがえないように気をつけよう。b「季」を「委」や「季」としてはいけない。「節」の右下の部分は「おおざと」ではなく「ふしづくり」である。c「勝」はつくりの横棒の本数を間違えないように気をつけよう。

2 Xはいきおいよく跳ぶ様子を、Yは瞬間的にそつと姿を現す様子を、Zはしっかりと物をつかむ様子をそれぞれ表している。

3 わざと凶に乗ったことをいってお母さんにたしなめられるやり取りを楽しんでいる。文章の冒頭に「コーちゃんは何日のように家に遊びに来た」とあることから、コーちゃんがハチを気に入っているだけでなく、もともとサトルとても仲がよいこともうかがえる。

4 ハチをかまわなくてやれないときに、ネズミのオモチヤをあたえるとハチが「ひとりではばらく」遊ぶようになるのである。サトルたちにとってはありがたいことであるので、イの「くれる」がふさわしい。

5 ネズミのオモチヤと違って、本物のネズミは「3」なくても叩かなくても勝手に動くのである。ネズミのオモチヤが何をしたときに動いていたのかを、ハチが夢中になって遊んでいたところに注目して探せばよい。

6 オモチヤのネズミについては文中に「白い毛皮のネズミ」や「白いネズミ」と書かれていた。問いをかんちがいして「ねこじやらし」や「本物のネズミ」の色を答えないように気をつけよう。

7 Aはハチが家族に抗議したかった内容である。Bはみんなから悪く言われるので、ハチが会話を切り上げようとしている。Cは今さら機嫌を取りに来たサトルに文句を言っている。

8 I 直後がサトルのことばなので、— 線⑤は他の人の発言である。お母さんは「おやつよー」や「役に立たないわね」など女性によく見られることばづかいをするので、「いいさいいさ」と合わない。II — 線⑤から三行後に「いいんだよ、ネズミが獲れなくなっても。ハチはうちの大事な猫なんだから」とくり返されているところがヒントになる。ここにハチを大事に思ってお父さんの気持ちを加えてまとめればよい。「たとえ」に続けて書くので「ても(とも)」と「結ぶこと」を忘れてはいけない。

9 この文章では引き取られたハチをサトル一家やコーちゃんが大切に飼っているところがハチの視点で描かれていた。物語がだれの視点に立って書かれているかは登場人物の心情や考えを理解するうえで重要であるので常に意識しよう。

10 「子どもの頃」といえるのは、お父さんかお母さんである。お父さんかお母さんについて書かれた部分を、猫を飼っていたからどうなんだと考えて文章をたどっていくと、「お母さんは(ねこじやらし捌きが)もっと上手い」が見つかる。以上